勝場

佐渡金山から採掘された金のほとんどは、徳川時代（1603-1868）の日本の重要な貨幣であった「小判」と呼ばれる楕円形の貨幣に加工された。小判は 1622 年から 1819 年まで佐渡で生産されたが、政府が製造業務を再編成し、佐渡の金を江戸に送って製造させるようになった。

製錬・鋳造と小判製造はともに、厳重に警備された奉行所内で行われた。復元された建物内には、採掘された鉱石の山を、使用可能な金の塊に還元するために使用された工程を示す図解や鉱石を選鉱するための当時の設備が展示されている。

鉱石選鉱の解説

純金は、鉱山から採掘された金鉱石のごく一部に過ぎない。小判 1 枚を作るには 3 トン以上の金鉱石が必要で、その金を取り出すにはいくつかの工程がある。

破砕：金鉱石をハンマーで砕く。

ふるい分け： 砕いた鉱石を木製のバケツでふるいにかけ、より細かい粒子に分ける。

水による選別： ふるい分けられた鉱石に水を加え、「ゆり板」と呼ばれる専用の木製の受け皿を使って水の中でゆすられる。ゆり板を揺することで、軽い岩石は表面に出てきて、金が回収された。

粉砕： 分離されたもののまだ不純物の多い金は、大きい石臼で粉砕され、より細かい粉末になる。

ねこ流し： 細かな鉱石を木製の樋にながし、細かい金の粒を回収する。

小判の製造

破砕、粉砕、比重選鉱された金は、高度に精錬された鉱石はさらに加工するために持ち出される。鉱石から切り離された金には、銀を含む不純物が含まれている。この不純物の大部分を取り除かなければ、金を製造することはできない。

まず、不純な金を鉛を使って製錬し、金属から不純物を除去した。その後、鉛と金、銀の合金を再溶解して鉛を分離した。これを塩と混ぜて再び加熱すると、銀は塩化銀に変わり、これを取り除くと、ほぼ純度の高い金が残った。二次加工で純度を調整し、小判の規格範囲に収まるようにした。その後、貨幣製造職人は、金を叩いて楕円形の貨幣にし、「佐渡」の最初の漢字を刻印した。

勝場には、相川の発展と奉行所に関するパネルも展示されている。付属の図版は、金の発見によって、

小さな海辺の村だった集落が、人口 5 万人のブームタウンへと変貌を遂げた様子を示している。